

[ホーム](#) > [組織でさがす](#) > [埋蔵文化財調査センター](#) > 平成27年度 活動報告

平成27年度 活動報告

掲載日: 2015年12月10日更新

平成27年度の様々な活動報告

埋蔵文化財調査センターの発掘調査以外の様々な活動について随時報告しています。

3月15日更新 平成27年度設楽ダム関連発掘調査成果報告会の開催報告

調査研究課の佐藤です。

3月5日(土曜日)に設楽町役場の議場で、[平成27年度設楽ダム関連発掘調査成果報告会](#)(主催:設楽町教育委員会、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所、(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター、愛知県教育委員会)が開催されました。

当日は、主催者を代表して設楽町教育委員会の後藤教育長からの挨拶の後、愛知県教育委員会職員が埋蔵文化財の発掘調査に至るまでの流れと今年度の発掘調査全般の成果について説明を行いました。続けて愛知県埋蔵文化財センター職員が、発掘調査を実施した[川向東貝津\(かわむきひがしがいつ\)遺跡](#)、[大栗\(おおぐり\)遺跡](#)、[滝瀬\(たきせ\)遺跡](#)、[笹平\(ささだいら\)遺跡](#)の調査成果を発表しました。最後に愛知県埋蔵文化財調査センターの蜷江所長が今後の調査予定とまとめの挨拶を行い、会は盛況のうちに終了しました。

会場には発掘調査で出土した[縄文土器](#)や石器の一部の他、調査風景のパネルも展示され、出席された135名の方は、設楽町の縄文時代に強く興味をひかれたようでした。

この成果報告会は来年度も3月初めに開催する予定です。設楽ダムの発掘調査が本格化する中で今後の発掘調査の成果に期待がもたれます。



1段目 (左)会場の設楽町役場 (右)主催者代表挨拶 設楽町教育委員会教育長

2段目 (左)出土遺物 (右)発掘調査関連パネル

3段目 (左・右ともに)発表風景

4段目 終わりの挨拶 愛知県埋蔵文化財調査センター所長

3月11日更新 朝日遺跡出土の石器類の資料調査のために研究者の方が来館されました。

調査研究課の標本です。

3月9日(水曜日)・10日(木曜日)、朝日遺跡(清須市・名古屋市区)出土の石器類の資料調査のため、立正大学文学部特任教授の久保田正寿氏が来館されました。

今回のご来館の目的は、朝日遺跡から出土した**敲き石**(たたきいし)や**凹み石**(くぼみいし)等の実見です。これら石器類の用途についての詳細な解明が進められるなかで、当センターが収蔵・保管する資料を活用していただけることは、私たちにとっても励みとなります。

* **敲き石**: 直接手に握って用いた石器で、石器を製作するときなどに使用した。

* **凹み石**: 河原などで採取される丸みを帯びた石の表面にくぼみのある石器で、木の実を割ったりするときなどに用いられた。



【左: 資料調査の様子 右: 朝日遺跡出土の石器類】

3月1日更新 一色青海遺跡出土の赤彩籠の資料調査のために研究者の方が来館されました。

調査研究課の橋本です。

2月23日(火曜日)、稲沢市に所在する**一色青海**(いっしきあおかい)遺跡出土の**赤彩籠**(せきさいかご)の資料調査のため、首都大学東京大学院人文科学研究科の山田昌久教授が来館されました。

今回のご来館の目的は、MRI撮像による非破壊三次元撮像を行う新たな研究法の開発に関するものです。この新技術の開発によって諸資料の正確な構造などが解明されていくことへの期待が高まります。

* **一色青海遺跡**: 弥生時代中期後葉の集落跡。遺構としては、数多くの竪穴住居や、方形周溝墓等が検出され、東日本最大級の大型掘立柱建物もある。鎌倉時代から戦国時代にかけての墓跡も検出されている。



【一色青海遺跡出土の赤彩籠】

2月15日更新 奈良文化財研究所の연구원の方々が資料調査のために来館されました。

調査研究課の橋本です。

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の연구원の方々が、12月22日(月曜日)、1月26日(火曜日)、2月9日(火曜日)の3日間にわたって資料調査のために来館されました。

調査対象遺跡は、**高針原1号窯**(たかばりはらいちごうよう)(名古屋市東区)です。愛知県は古代から現代にいたるまで焼物の産地として有名ですが、猿投山の西南部、豊田市から刈谷市・豊明市・愛知郡東郷町・長久手市・日進市・名古屋市東部にかけての地域は**猿投窯**(さなげよう)と呼ばれ、数多くの窯跡が分布しています。平成8年に発掘調査が行われた高針原1号窯からは、**飛鳥時代の須恵器**が大量に出土しています。

今回の奈良文化財研究所による資料調査は、奈良県の飛鳥地域で出土した猿投窯産須恵器に関する研究の一環として行われたものです。

当センターでは、土器類・石器類・木器類・金属器類・骨角器類合わせて48,762箱(平成26年度末現在)を収蔵・保管しています。これら貴重な埋蔵文化財の数々は、全国各地で行われる展覧会への協力のほか、各種研究機関の資料調査にも活用されています。

研究のための資料調査をご希望の方は、電話・FAX・メール等でお問合せください。

* **須恵器**(すえき): 古墳時代、朝鮮半島から伝播した焼物。1000度以上の高温で焼き締められるので硬質となる。



【調査の様子】

2月8日更新 石座神社遺跡出土の鉛製鉄砲玉の資料調査のために郷土史家の方が来館されました。

調査研究課の橋本です。

2月5日(金曜日)、新城市に所在する石座神社(いわくらじんじゃ)遺跡出土の鉛製鉄砲玉の資料調査のため、郷土史家で「設楽原をまもる会」の名誉会長小林芳春氏が来館されました。

石座神社遺跡は、戦国時代の天正3年に織田信長軍の鉄砲隊と武田勝頼軍の騎馬隊が戦った激戦「長篠・設楽原の戦い」を望む丘陵上に営まれた遺跡です。

設楽原周辺では17点の鉄砲玉が採取されていますが、石座神社遺跡からは鉛製の鉄砲玉5点が出土しました。

日本の歴史上、著名な「長篠・設楽原の戦い」ですが、さらなる解明にむけて当センターで収蔵・保管する資料を活用していただけたら幸いです。



【石座神社遺跡出土の鉛製鉄砲玉】

12月25日更新 中京大学の出前講義に行ってきました。

調査研究課の佐藤です。

12月16日(水曜日)、中京大学 名古屋キャンパスで出前講義を行いました。

講義名は「考古学概論」で、1年生17名、2年生15名を前に講義しました。

講義担当である都築暢也客員教授から講師の紹介を受けた後、「考古学って何? 発掘って何?」として、遺物や遺跡についての基本的な説明を行い、大学周辺にも古墳時代から中世までの聚が所在していることを周辺の遺跡地図を使って解説しました。学生たちは現在、ビルが立ち並ぶ八事周辺に遺跡が所在していたことについて興味をもったようでしきりにメモをとっていました。

次に、「『器』はどのように変わっていったのか?」として、焼き物の歴史を概説した後、5~6名ずつのグループに分かれ、実際に遺跡から出土した土器や陶器を、「土器・ド・キット」※1を使って時代順に並べていきました。グループ内で遺物を観察し、材質を手掛かりにして「土器か? 陶器か?」を話し合ったり、釉薬(ゆうやく)※2の有無を確認したりしながら配布した資料にまとめていきました。話し合いが煮詰まっているグループには、時折、概説資料を示しながらヒントを与えて議論の手助けをしていきました。並べ終わったら答え合わせです。「どの遺物が何時代のものか」について、決め手となるポイントを解説しながら講義を進め、解答を示すたびに小さな歓声やタメ息が聞こえていました。

さらに、「考えてみよう! 土器の使い方」として、朝日遺跡※4から出土した弥生土器、円窓付土器(まるまどつきどき)※3の用途を通常の壺と比べて考察してもらいました。まずは2種類の弥生土器を間近で見てもらい、さらに触れてもらうことから始めました。そして朝日遺跡の概要を説明し、特にどこで円窓付土器が集中して出土するかを説明しました。その後、各自で円窓付土器の用途について配布資料にまとめてもらい、数名に発表してもらいました。出土している場所から「お供え用のものではないか」との意見が多く出されました。最後にこの土器の用途については定説がないことを告げると、学生たちは謎の土器に一層興味をもったようでした。

講義の最後には、名古屋城三の丸遺跡※5から出土した陸軍関連の遺物を示し、新たに考古学の分野として注目されはじめている戦争考古学※6について概説し、また、愛知県埋蔵文化財調査センターの年間行事を紹介して終了しました。

考古学に興味をもっている学生が多いため、全員が静かに集中して講義を受けていました。特に実際に出土遺物に触れ、話し合っている場面では全員が目を見つめていたことが印象的でした。

当センターでは、このように大学生から小学生までを対象に出土遺物に触れることで活きた歴史を体感できる出前を行っています。この出前は、歴史に興味や関心をもって一般社会人の地域の歴史サークルの講座、研修でも依頼があれば行ないます。ただし、実施には事前の調整が必要であり、場合によっては依頼にお応えできない場合も生じることをご承知ください。

語句解説

- ※1 「土器・ど・キット」:埋蔵文化財調査センターが所有する出土遺物に触れる学習コンテンツ。遺跡から出土した縄文土器、弥生土器、須恵器(すえき:古墳時代から使用された焼き物)、灰釉陶器(かいゆうとうき:古代に使用された釉(ゆう)をかけた焼き物)、山茶碗(やまぢゃわん:中世に使われた焼き物)、天目茶碗(てんもくぢゃわん:中国から伝わり国内で焼かれた茶道で使われる茶色の釉がかかる茶碗)、近世陶器をサンプルとしてひとまとめのキットとなっていて、各焼き物の特徴から時代を考えさせるコンテンツ。
- ※2 釉薬(ゆうやく):陶器や磁器にかける薬で、窯で焼くことにより化学変化をおこし様々な色に発色する。
- ※3 円窓付土器(まるまどつきどき):弥生時代の土器で壺の本体に大人の拳大(こぶしだい)の穴がつく。穴は土器を焼く前につけられる。
- ※4 朝日遺跡:清須市から名古屋市区西にかけて所在する東海地方最大級の弥生時代の集落遺跡。紀元前3世紀から紀元4世紀まで存続する。
- ※5 名古屋城三の丸遺跡:名古屋市中区北部、名古屋城の外堀と内堀に囲まれた現在の官庁街に所在。弥生時代から近代までの遺跡。特に江戸時代は尾張藩に仕えた上級家臣団の役宅(やくたく:公務のための屋敷)が存在した。
- ※6 戦争考古学:近代以降の戦争関連の遺構、遺物を対象とする考古学。文化庁も平成24年に熊本県の田原坂などを西南戦争跡として国の史跡として指定している。



【(上)講義風景 (下左)土器・ど・キット (下右)円窓付土器に触れる】

12月2日更新 愛知県立天白高等学校で出前授業をしました。歴史的思考力を養う体験学習(アクティブ・ラーニング)を行いました。

調査研究課の構本です。

11月11日(水曜日)と12日(木曜日)の2日間、愛知県立天白高等学校で第2学年文系生徒を対象に出前授業を行いました。

今回の授業では、「埋蔵文化財の調査、保存の意義についての認識を深めること」、「本物」の遺物に触れ、質感等を感じることで歴史への興味・関心を高めること、「土器の用途について類推し歴史的思考力を養い、自己の考えをまとめ発表すること」を目標として、1日目は「**煮炊具の変遷について考える主題学習**」、2日目は「**円窓土器の用途について考える主題学習**」を行いました。

はじめに、現在調査中の豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業関連遺跡についての説明と発掘調査成果の一部を紹介しました。また、『愛知県文化財マップ』を引用して、学校周辺の遺跡についても紹介しました。生徒の皆さんは、現在、愛知県内で行われている発掘調査について興味を示すとともに、自分たちの学校の近くや通学路沿いにもたくさんの遺跡が存在することに新鮮な驚きを感じていました。

1日目の「**煮炊具の変遷について考える主題学習**」では、各時代の煮炊具を観察して特徴を理解し、「時代とともにどのような形状変化がみられるか」、そして、「なぜ、そのような変化が生じたのか」について考えてもらいました。

2日目の「**円窓土器の用途について考える主題学習**」では、愛知県内の朝日遺跡から出土した円窓土器を題材として、その用途についてグループで意見を交わしたのちに発表してもらいました。

両日ともに、生徒の皆さんは、本物の土器をじっくりと見たり、互いに意見を出し合ったりしながら、考察を深めていました。時には、クラスメートの述べる意見に対して「おおっ」「なるほど」などの声が、教室のあちこちから上がっていました。